

## 創意工夫を生かした「イメージ奏法」による想像力の育成

—— 小・中・専門学校で音楽表現向上を目指す授業の取り組み ——

企画・司会：武 本 京 子（愛知教育大学）  
話題提供者：福 澤 維斗子（名古屋市立植田小学校）  
山 口 茉莉子（長久手市立北中学校）  
和 沙 舞 子（名古屋こども専門学校）  
指定討論者：木 下 千 代（兵庫教育大学）

### 1. 主体的で対話的な深い学びのための「イメージ奏法」授業実践の提案

武本 京子

音楽の新学習指導要領の目標では、主体的で対話的な深い学びを生活や社会と関連づけることが提案されている。ただ歌い奏でるだけではなく、音楽を媒介に生活や社会を考える一体化した心の教育が求められている。主体性と対話に重きを置き、心に寄り添う音楽教育法を目指す「イメージ奏法」（武本1995, 2013）を学校教育現場へ導入し、学校の授業形態の中で「イメージ奏法」の授業実践を提案した。

#### 1) 「イメージ奏法」導入の利点

①表現したいことを曲線、絵、言葉、物語で視覚化することにより、音楽という抽象的なものを把握する事が苦手な児童や生徒、また音楽表現が苦手な音楽経験が少ない児童や生徒でも、音楽を自分が理解できる感覚の具現化としてとらえることができる点である。その結果、思い描いた表現が実現した時の喜びや達成感を与えることが可能である。

②「イメージ楽譜」が教師と生徒のコミュニケーションツールとして機能し、共有することができる点にある。児童・生徒は楽曲の構造を主体的に考え、他者と対話することにつながり、音楽の中に共感する感情を見つけることが可能になる。このことは、児童・生徒の感性の育成につながると言える。音楽を媒介にして、自分のうちにある感情に気付かせ、

友達の良さや違いに気付き、互いに認め合う過程から間接的な道徳教育にもつながることが期待できる。

③短時間で効率的な指導が可能になる点である。授業において、児童・生徒と教師の対話や個々への指導には制限があり、短時間での指導が求められてきた。「イメージ奏法」では、自分がどのように演奏内容を表現したいか、どのような奏法で演奏したらそのイメージが伝わるかを見つけるための「演奏設計図」である「イメージ楽譜」を制作する。視覚化することは、教師の指導にとって短時間で児童や生徒の思いを読み取ることを可能にする。

これらの3点の利点を生かして「イメージ奏法」を教育現場へ導入している3校の実践授業の話題提供をいただいた。

### 2. 「イメージ奏法」を授業に取り入れた実践例

#### 1) 小学校における歌唱と器楽の表現力を高める「イメージ奏法」実践授業

福澤 維斗子

学童期の児童、特に発達障害を持つ児童は聴覚からの言語情報インプットに弱い傾向があることから、視覚的な具体物の教材の必要性がある。音楽科の演奏の活動において、音程やリズムなど、技能的なことにとらわれすぎて、表現に対する思いや意図を持ちにくいことが目立つ。そこで「イメージ奏法」を導入し、視覚的に音楽を表現することを通し

て、小学校学習指導要領でも示されている①楽曲構造を理解する、②表現に対する思いや意図を持つ、③主体的に音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わう、以上3点を目標に、実践を行なった結果、個々の児童の気持ちに寄り添い、目標に沿った指導ができた。

## 2) 中学校「音楽」における表現力向上を目指す「イメージ奏法」実践授業

山口 茉莉子

悩みや葛藤の多い中学生の心を音楽の力で開放していくことを目的とし、その手立てとして「イメージ奏法」を実践し、表現力向上を目指した。研究教材である「大地讃頌」に、教師による「表現曲線」ガイドラインを記載し、そこに生徒は自分の感じた「イメージカラー」「イメージ語」を付け、自分だけの「イメージ楽譜」を制作した。その結果、生徒に「イメージ楽譜」を創らせることにより、彼らが何を表現したいのか、視覚的に把握することができ、またそこから生徒の心理状態、成長過程を読み取ることができ、指導の上で大変効果的であった。

## 3) 保育者養成課程学生の豊かな表現力と演奏効果を高める「イメージ奏法」実践授業

和沙 舞子

保育者養成課程のピアノ学習の授業において、最適な表現方法を学生自身が考え、表現したいことを物語・色・映像などで視覚化することにより、生徒が意欲的に練習を行うようになった。その結果、指導者は演奏指導が行いやすくなった。また「イメージ奏法」を活かすことで、ピアノを演奏する表現方法や音楽の溢れる想像の世界を問いかけることができた。これは、幼稚園教育要領にある「表現」のねらいにつながり、保育者の豊かな感性育成には「イメージ奏法」は役立つと考えられた。

## 3. 質疑応答とまとめ

①本来の楽曲のありかたと違う方向へ作成した「イメージ楽譜」の場合、どのような手立てで指導するのかという質問に対し、学生の意図を聞き、それを尊重しつつ、作曲者や楽曲分析を踏まえるところになるのではと問いかけ、もう一度考えるよう指導していると答えた。また実際に生徒の示したように演奏をし、否定はしないがヒントを与え、対話を通してあるべき作品に導くことを行なっていると述べた。②イメージをとらえた後、どのように音楽につなげるのかという質問に対し、色や物語などのイメージから、強弱や音色、間の取り方などを考え、技術習得の意欲を高める指導を行い、専門用語だけでなく、比喩表現などを使っていると述べた。③個々が作成した「イメージ楽譜」をどのように集団の共通認識とするのかという質問に対し、個々のイメージを取り入れながら、音楽の要素で判断し、模範演奏を聴きながら考えさせ、対話を通してまとめていくと述べた。④音楽的能力と「イメージ楽譜」を作成する能力は比例するのかという質問に対し、歌が苦手な生徒でも表現力の豊かな生徒は多く、固定概念にとらわれず自由に表出している場合があるため、「イメージ楽譜」を共有することにより、普段は目立たない児童・生徒も互いに認め合うことにつながっていると述べた。

「イメージ奏法」実践の結果、児童・生徒・学生の心に寄り添った、主体的、対話的な学びが確認された。

\*本研究は科研費(18K00206)の助成を受けている。

## 引用・参考文献

- 武本京子(2013)『ピアノを学ぶ人へ贈る武本京子のイメージ奏法解説書』音楽之友社。  
中田(武本)京子(1995)『生徒と先生のための楽曲イメージ奏法』ドレミ楽譜出版社。

文責：武本 京子(愛知教育大学)